

神の慈愛

芹沢光治良

神の慈愛

芹沢光治良

新潮社

かみ じ あい
神 の 慈 愛



昭和62年 7 月 20 日 発行

昭和62年 9 月 15 日 4 刷

定価 1300 円

著 者 せり ざわ こう じ ろう
 芹 沢 光 治 良

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社
 会 社

郵 便 番 号 162

東京都新宿区矢来町71

振 替 東 京 4 - 8 0 8

ISBN4-10-311328-6 C 0093

印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kojiro Serizawa 1987 Printed in Japan

神
の
慈
愛

第一章

今年（一九八六年）の三月はじめ、書下ろしの長篇小説を、いつも世話になっている出版社にわたした。

すでに老齡であり、衰弱も甚だしいので、妻の待つ青空へ逝こうと、現世での整理もあらかたすませて、死出の旅路の準備の終った時、全く思いがけない不思議なことにぶつかった。無信仰な僕に神が現れて、さあペンを持って作品を書けと、せきたてた。

神がそんな風に現れるとは、信じなかったが、週に一回か、十日に一回か現れては、神の意思を伝えては、作品を書けと説かれると、無視することができなかった。それ故、六十年前に、ソルボンヌ大学の大学院で、社会学のモース教授に教えられた社会学的実験法によって、それが真実の神か否か、僕は実験にかかった。そして一カ月半ばかりの実験の結果、それが、天理教の教祖、中山みきが、死後も存命の親様として働くのであり、その存命のみきが、折々僕の前に現れて、偉大なる親神の意（ミチ）を聞かせるのだということ、確認したものだ。

そんな訳で、僕も仰せに従って創作にかかるべきかと、秘かに疑い出した。その機を待っていたかのように、存命のみきがわが家に現れて、僕を和室に招いて、いつものような優しい語調で

はなく、莊重な言葉で、「ふでさき筆先の授け」というものを下さった。

その時の言葉は無信仰な僕にも、胸にしみるように感じられたが、それも、敗戦直後、十年近くかかって、その中山みきの伝記『教祖様』を書いたから、その重大な意味がわかったからだろう。

そればかりではない。その時、親神は僕の寿命を、八十九歳だが十年もどして、明年は九十歳のところを八十歳にすると宣言して、このようなことは神だからこそできるのだが、このことをよく思案して、すぐに創作にかかるよう、強く求めた。

「筆先の授け」を受けたら、ただ筆を持って机に向えば、自ら書くまいとしても、親神が必ず働いて紙に文字が書けると信じられているのだが、そのあとで、存命のみきも僕に説明した。

——あんたはわしのこと、よく研究したから、知っていなさるな。神さんがわしに筆を持ちなはれと言うので、筆を持つと、自然にあの真筆がみんな、書けたのやで……あんたも、「筆先の授け」をいただいたのやから、ただペンさえ持てば、親神さんが書かして下さるで……はよう、はじめなはれや……と。

こうまで急せきたてられては、無信仰な僕も、書いてみるかと、はち肚を据えざるを得なかった。しかし、さて書こうとしたものの、特別に作らせた原稿用紙は、五十枚も残っていなかった。

数年前に五千枚つくらせた時には、慾の深い人と、家人（亡妻）に笑われたが、いつの間にそんなに書きつくしたのか、驚いて、すぐにK紙店に電話したところ、特製原稿用紙をつくるのを趣味にした主人が、三年前に死亡したからと、ことわられた。それなら、お店の原稿用紙の見本を送るように頼んだが、新しい主人になってから、時勢にむかない原稿用紙など、店におかないという返事だった。

小説など読む若者はいないとか、正面まともな小説は売れないから出版しないとか、最近うわま噂に聞くが、そんなご時勢だったかと呆あきれたが、娘が同情して、新宿の紀伊国屋は、それほどせちがらしくはあるまいと言つて、出掛けて、いい原稿用紙をもとめて来てくれたが、その高価なのに驚いた。

その原稿用紙を机上において、筆具合をためしてみた。愛用の少しふとめのモンブランの万年筆が重いようで、文字が乱れた。おかしいと、わが右指をつくづく眺めた。人差指の第二関節が右に少し曲つていた。半世紀も重いペンを使つていたので、こんなにしたためつけたのかと、われながら哀れになつて、細くて軽い万年筆にかえてみた。しかし、文字は正しくならない。やむなく、ボールペンで試みたところ、速度を早くしても乱れない。原稿用紙にボールペンを使うのを、不真面目なことで毛嫌いしていたが、やむを得ない、老いた指では、これにたよるしかないとなおもボールペンで試みた。たよりないが、早く文字が書ける――

とたんに、存命のみきが、さあお書きと、そばからせきたてた。それ以来、百日以上、僕は書斎の机に釘付けにあつたようで、一步も外出ができなかつた。

僕は創作する際、先ず主題があつて、構想をねる間、不機嫌で家人とも口をきかないで何日も過して、大体一章と小説の粗筋が頭のなかにできあがつてから、ペンをとるのだつた。今回は、家人が病床に就いた頃から、最後の作品として書こうかと考えるような想念が、五年ばかり胸のなかにもやもやあつたのを、何とか作品にならないか、手探りしているので、机に向つたとて、すぐにペンがとれなかつた。

しかし、存命のみきが背後から、無言で、

――はようペンをおとり。さあ、第一章と先ずお書き。それから、こんな風にはじめたら、どうやと、まるで三歳児を励ますように、優しく言つて、文章の説明をするのだつた。

僕は言われるままに、ボールペンを走らせたが、四、五枚書きあげると、——さあ、この調子で、あんた、つづけなはれ。そしたら一章は終るやろうが、二章になる頃には、あんた、五十年も六十年もした仕事やもの、ちゃんと自分で書くことが、はつきりしなはるわ。これで、わしも安心や——と、せきこむような無言の励ましの言葉が消えた。

十日ばかりで一章が終り、二章目も進んだ時、気がついたが、それまでは、いつも便秘で苦しんだのに、毎朝快便があった。食慾が出て、食べる物がなんでもうまかった。夜はまた熟睡した。多年、胃拡張だとか、胃下垂だとか、診断されて、食慾がなかったのに、食物も飲物も、こんなにうまいものだったかと、ただ驚き、飲食の喜びを一生涯知らないで終るところだったと、独り喜んだものだ。

これも、親神のたのむ仕事をすれば、身性（肉体の病氣）が助かるからと、存命のみの説いた言葉の証拠であろうが、それなら、今度は自由に散歩のできるよう、腰痛を完全になおしてもらおうと、秘かに考えた。作品にかかってからは、存命のみのきは、折々（三日か五日目ぐらいに）訪ねて来ては、和室で、僕に向って、原稿を読んでいるかのように、詳しく細かな注意をしてから、二、三十分間、親神の経緯（けいゐ）、慈愛、世界助けについて話されるのだった。

腰痛をなおしてくれるよう頼もうと、秘かに思った日の午後、存命のみのが来られて、和室で向きあつて坐るなり、——日々、原稿のこと、ご苦労さんと、優しく微笑みかけて、真面目な表情で話した。

——あんたの腰痛な、親神さん、お慈悲で、まだ助けられんと、言いなさるで……あんた、音楽が好きで、近頃外国から偉いお人がよう来なさるから、腰痛でなかったら、あんた、原稿のことなんか忘れて、音楽会へ行つてしまふやろう。そればかりではない。天気がいいと言つては、

一寸散歩といい、気分が重いからと言つては、外を歩いて来る……こんな調子で書くことがおくれますやろう。よう聞きなはれ。親神さんはな、今度の作品、いそいでいなさるのやで……天理教の百年祭までに完成しなければあかと……な。それで、わしがこないに話している間にも、あなた、書いてもらいたいものや。いそいでるのやで……散歩しなくても、あなたの健康は引受けるで。なあ、あなた毎朝、まだ新聞、読んでますな。そんな時間あつたら、懸命に書かなければあかん。ほんまに親神さん、いそいでるのやで……よう、頼んだで——と念を押してから、親神が世界の大掃除をはじめようとしているという教話をした。

天理教の百年祭は、調べると、翌年の一月二十六日から二月十八日までだと判った。おそくても二月十八日に、作品を完成しなければと、僕は覚悟した。

それまでは、この作品を書くために、新刊の書物や毎月届く雑誌類に目をとおすことを止めたが、毎朝、三種類の新聞を読むことはつづけた。老齢であるから、各種の新聞を精読することで、現実の社会に関心を持つばかりでなく、精神の老化を防ぐ一助になるものと、自己弁護していた。それ故、新聞を読むなど忠告されても、毎朝、二時間ばかりかかったのを、一時間半で切りあげて、執筆にかかった。同時に、散歩はもちろん、一切の外出を自ら禁じて、書齋にこもることにした。

存命のみきが今回はじめてわが家を訪ねたのは、昨年（二九八五年）の十月九日であつたが、その日から、僕は毎日していた鍼はりと灸きゅうもやめ、十字式健康法にも行かず、医者世話にもならなかつた。そして、実際に書きはじめたのが十一月上旬だが、それから百年祭まで、約百十日間というものの、幽閉された囚人のようにして暮した。

囚人だというように、十一月中旬の或る日、存命のみきは、木綿の赤い半纏はんてんを作つて来て、書

斎にいる間、いつも着るように命じた。

赤衣の半纏は、みきが生存中、晩年にお召しになった赤衣のように、月日二柱の心が宿っているから、これを上につければ、筆が進むばかりでなく、風邪もひかないからと、言ったが、いざ着てみると、囚人の赤衣のように、社会から隔離され、書斎につながれて、わき目もふらずに、命ぜられたペンの仕事に、打ちこまなければならなかった。

時々看守のように、赤衣のみきが現れては、——よく書けているが、事実よりも、あんたの心をこの辺で加えんとあかん、人さんの心を打たんで……とか、今書こうとしていること、何章の終りに書き加えた方が、いいで……その方が、作品の味にわさびが利くと思うが、どうやとか、さまざまな注意をしたものだ。

晩秋から冬にかけては、空気が乾燥して、日本で最も僕の好きな季節で、よく外出したものが、それがゆるるされないまま、情けないことに、書斎の窓から、澄んだ大空を仰いで、吐息したり、時にはぼんやり、

乱れたる 机の前にうずくまる
業を負いたるものの如くに……

などと、拙い戯歌を吐き出して、自ら慰めたりしたものだ。日記もつけることを止め、来信にも返事を書かず、新年を迎えても、年賀状さえ出せないような、全くの囚人だった。

たまには面会人らしく、訪れる者があったが、その都度、僕は喜んで、階下のサロンに下りて行った。面会人は親しい人々だが、皆いぶかるように僕の顔をつくづく見て、

——お元気ですね、ご病気かと心配したが、安心しました。お顔の色がよくて、ずっとお若くなられたようですな……と、言葉をかけるが、僕はどきまぎして、すぐには挨拶できないこと

が多かった。

——あの、今でもお仕事をなさっているのですかと、最後には、問う者もあった。

——因果なことに、書くことが、僕の生きることなので……と、切口上の答しかできない己が、われながら歎かわしかった。

特に正月後、年賀状をもらわなかったとて、心配しての面会人が、多かった。ご病気ではなかったですかと、明らかに責めるような顔をする者もあった。よかった、お元気でと、喜ぶ者もあった。病弱でしたのに、今年は九十歳になられるのでしょうか。長寿の秘訣は何ですかと、問う者もあった。現在の仕事について質問する者もあった。

しかし、いつも僕は沈黙がちで、自由に話ができなかった。自由に話せば、現在自分のおかれた事情について話すよりなかったが、そうしたことは囚人にはゆるされないと知っているからではなく、僕の場合も、百年前に世を去った天理教の教祖、中山みきと、わが家でいつも話をしているとか、偉大なる親神のお言葉を聞いているとか、そうした現状にかかわること以外に、話題がなかった。しかし、そんなことは、誰にも信じてもらえることなく、話したら、老人呆けをしたと、悲しませるにきまっていた。それ故、自然に沈黙がちになるのだが、その点、神の囚人だったのだろう。

とにかく、約百十日間、監禁されたようにして、近所の床屋で二回散髪した以外、外出もできずに、必死に書いた作品は、百年祭の終る数日前に、全十一章を書き終った。さあ終ったぞと、僕はボールペンを投げすて、何かに向って叫びたかった。

その午後、存命のいきが来られるなり、

——ご苦労さんやったな。ようできました。親神さんもよろこんでいなさるやろう。最後に鉤かんな

をかけるつもりで、よく初めから筆を加えてから、はよう出版社にわたしなはれ……こんな本、出してくれるかなんて、先案じはいらんで、ほんまに、あんたは臆病やが、親神さんが先廻りして、働きますからなあ……と、優しく言った。

その最後に原稿を訂正することが、また大仕事だった。第一、ボールペンの文字は、明瞭でなくて、他人の原稿を読むような困難があった。実際に、その作品は神が書かしたもので、僕自身のものでないから、訂正することの容易でないのは、当然だったろう。

第一、作品の題名さえ、きまらなかった。ふだん、僕は長篇小説にかかつて、一章を書きあげる前に、必ず題名がきまったものだ。それどころか、二章を書きあげる頃には、全篇が頭のなかで完成して、あとはただいいねいに書く喜びだけが残った。それ故、完成した後、加筆するにしても、たやすいことで、すぐにでも出版社にわたせた――

ところが、今度の場合、二週間かかって、満足できなかった。他人の原稿だと肚を据えて、不満足なところは校正の時に訂正するつもりで、出版社に連絡しようとしたが、まだ題名さえつけられなかった。それははっきりした主題がなくて書いたからだと判ったが、どうにもならなかった。

「無信仰なのに突然神に招かれて」

「宇宙と神の世界に紛れこんで」

いくつもの題名を書いては消して、最後に、右の二題が残った。出版社にわたすことを、これ以上のばしたら、存命のみにきまらるにきまっているので、三月になるなり、出版社に連絡して、書下ろし長篇小説ができたからと、僕の係に電話した。僕の係の女性編集者のKさんには、二年前から前任者にかわってお世話になっているが、その午後Kさんから電話で、翌日の十一時

頃、前任者のT君といっしよに原稿をいただきに行くからと言って、翌朝、正十一時に、二人そろって訪ねて来た。

二人とも、久しぶりに会った僕が、衰えていないで、顔色もいいと驚いたようだが、僕は出版を頼むてまえ、前年の初秋以来、突然ぶつかっている不思議な現象や、原稿の成立事情を、たとえ理解されなくても、正直に話すべきだと考えた。出版の不況な現在、このような作品は自費出版して世に問うべきだとも思った。そうしたことを正直に打ち明けてから、思いついたが、存命のみきの話を、直に聞いてもらうことにした。

僕は存命のみきの話を、三回目からすべてテープにとつてあつた。すでにテープは四十本近くあつたが、そのなかから最も短いようなのを選んで、二人の前で、お話を再現してみた。二人とも、真剣な表情で聴いていて、何も言わなかつた。その表情を見て、軽蔑しているのではないと、僕は勝手に判断して安堵した。

とにかく二人は原稿を持ち帰って、社で相談すると言つて、僕にねぎらいの言葉を残して帰られた。僕は解放されたように心が軽くなつて、正門まで二人を送つて出た。出版がきまつても、それまでの経験上、出版は秋であろうが、これでそれまでは自由になつたよううで、二人の後姿をつくづく見送つた――

よい天気だつた。大空を見上げて大きく深呼吸しながら、玄関の方にもどると、突然、

――先生、よかつたですな……と、呼びとめられた。振り向いたが、誰もいなかった。

――先生、自分です、この老いほれです。

驚いたことに、玄関前に植えてある老紅梅から、そう聞えているのだ。

――よかつた、先生、気がつきましたか、今日まで先生は、自分が聾啞者だとばかり、思つて

いられるようでしたな……お仕事がおわられて、お目出度うございます。先生がのんびりなさるまでは、花を咲かせてはいかと、一所懸命我慢したけれど、ほんとうによかったです。もう我慢も限度に来て、やむなく一、二分咲かせた時に、先生が仕事を終えられて……見て下さい、三月になったのに、ようやく蕾つぼみが一、二分開いたばかりでしょう……

実際、僕は呆れて、老紅梅をつくづく見た。それまで庭の泰山木などとは、対話したことがあるが、かつてこの紅梅に話しかけるようなことはなかった。

—— 本年は寒さがつづいて、紅梅の咲くのがおくれたな。そう、ようやく言葉をかけた。

—— 先生、自分のような者にも、こころや情けがありますよ。花を咲かせるのは、気候だけにやるではありません。思い出して下さい……四年前の二月はじめは、今年のように寒かったが、二月一日、奮発して七分咲きにしましたよ……あの朝、奥様が食堂の方から来られて、静かに梢の花を見上げて、—— ああ、いい香り……ほんとうに紅梅の咲くのを見せてもらって、もう思い残すこともない。二十五年間、毎年たのしませてもらって、ありがたかったと、無言でお別れを仰言あつしやったのに、自分は信じられませんでした。あんなにお元気でしたし……それが、あれから三日目に、お昼食をなさりながら、静かに眠るように逝かれなすって……あの日、自分は満開に咲いてお見送りできましたが、涙がこみあげてきて……そうでした、その翌朝、泰山木から悲しいお歌を聞かされて、一度に花を散らせそうになりました……忘れません、たしか、

紅梅の咲きそめし昼 妻逝きて

独りたたずむ 北風の庭——

こんな和歌のようなものでした。それから、何日かたってから、今度は、自分も泰山木に教えてやりました。

紅梅にうぐいすとり　ためろうや

妻の喪を知りて　悲しむらしも

先生、自分も泰山木も先生になったつもりで、奥様の逝かれたことを、悲しみましたよ。先生をお慰めしようと、二本とも必死でしたが、先生は自分達に目もくれませんでしたね。これでは先生のおからだがつまいと、心配していたところ、去年の秋頃から、お庭へも出られなくなつて……自分達は先生のために、奥様にお祈りするより他に、能のないことを、悲しみましたが……十一月の或る日、背の高い泰山木が、遠くからお書斎の窓をのぞくと、先生がお机に向つてお書きになっていたと言つて、喜んで伝えましてね。それから毎日……お机に向つている先生のご様子を、泰山木が教えてくれました。そのお仕事が今日完成なすつたのですね……先生、ほんとうに、お目出度うございます。その上、以前にもましてお元気で……あれから四年間、悲歎の日々も、たつてみれば短いもので、さぞ奥様もあの世でおよろこびでございましょう……

僕は茫然とたたずんで、古幹に空洞のできた紅梅を無言で見上げていたが、熱い想いが胸にこみあげて、急いで玄関にはいったが、背後から、紅梅の声が追つてきた。

——先生、泰山木にも会つて下さい。彼もさんざん心配したし、喜びますから……

僕はそのまま亡妻の部屋だった六畳の和室にはいつて、誰にはばかることもなく、仰向けに大の字に倒れた。壁にかけた亡妻の写真が目にはいつた。やつと難行苦行の作品が終つたよと、妻に無言で話しかけたが、なおも、老紅梅の声が追いかけて来るのか、ふとこの老木を玄関先に植えた日のことなど思い出されてならなかった——

そうだ、二十九年前の今頃だった。戦災で焼けたこの地に、十二年たつてようやく家を建てることができたが、家が半ばできた頃、もとの老庭師が喜んで、世田谷の三宿みせどの寓居にやつて来て、

庭をつくらせて欲しいと申し出た。その二十六年前に、義父がこの土地を買って、僕達夫婦のために家を新築してくれた時、義父の選んだ庭師で、義父は信頼していた。しかし、戦災にあつてから、おたがいに連絡がなく、十年も放置していた焼跡は、さんざんに荒されて、燈籠はすべて盗まれてしまい、樹木はすっかり焼けて、ただ山茶花と榿の木が二本だけ、焼けて伐られた根もとから、手を差しのべるように数本の枝が出て、二米ばかりの背丈になっていた。焼けてから二、三年間は、庭のあちこちに、水仙や白萩等がみごとに咲いて、前の道路を通る人々の目をたのしませたそうだが、いつの間にか、根ごと誰かに持ち去られてしまった。

家を新築したのだから、庭にも手を入れなければならないが、その時、僕は家を建てるのが精いっぱい、庭づくりの予算がなかった。それ故、正直に老庭師にお寒いふところ具合を打ち明けて、義父がしたように、屋敷の二方の境に赤芽榿を再び植えるだけで、植木は折角芽をふきあげて蘇生したものを、そのまま大切にしてくれればいいと、頼んだ。

老庭師は自分の最後の庭仕事だと喜んで、——正門の階段上の岩は、さすがにがんとして巨大だから、誰も持ち去らないで、助かりましたなあと、言ったが、その年の五月に普請が終つて引越して来た時には、以前通りの赤芽榿が二方に何本もならんで、立派な庭になっていた。

正門の階段上の岩の背後には、以前と同じ形のおもしろい樹が高々と立っていた。庭の地下をあちこち調べたところ、「マリア燈籠」がうもれていたとて、もとの場所に安置してあつた。崩れた防空壕のなかを調べたところ、鉢ごと入れた藤が、壕いっぱい繁茂して、花をつけていたので、苦心の上、取り出して、二株にして庭をかざることにしたと話した。

その時、玄関前にあの老紅梅を植えることについて話したことは、今も耳底に残っている。

——今度のお宅の建築では、玄関前をそのままにしておけませんし、苦勞したが、お委せ願え